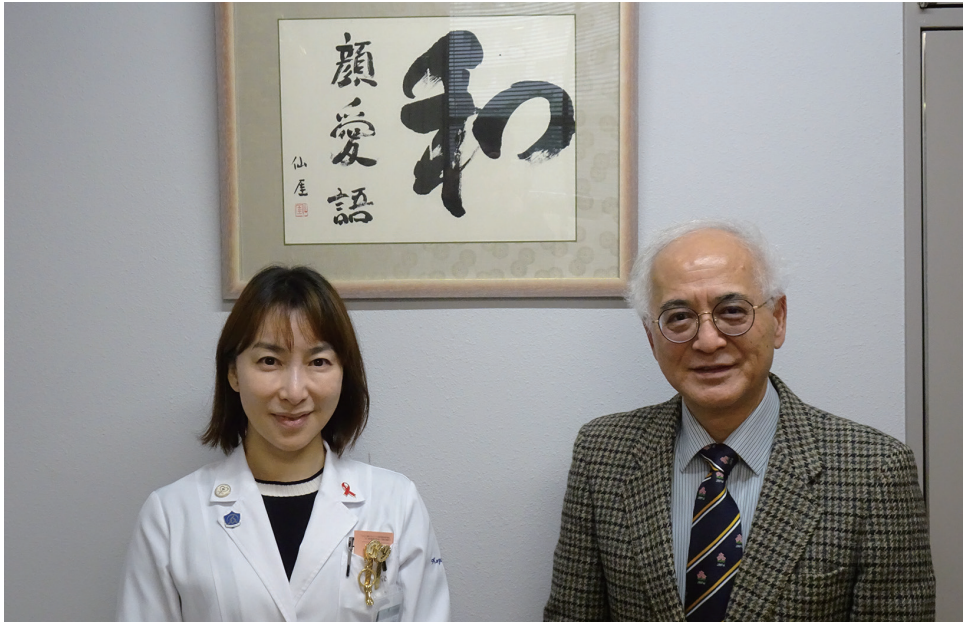


## 琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学講座 教授 山本和子先生



○久貝理事 先生は、1年半近くなりますかね。

○山本教授 はい。1年と3か月ですね。

○久貝理事 琉球大学の大学院の感染症・呼吸器・消化器内科学講座の教授という事で、遅ればせながら就任おめでとうございます。

○山本教授 ありがとうございます。  
今後ともよろしく願い致します。

○久貝理事 就任にあたって、感想と、抱負をお聞かせいただければありがたいと思いますがいかがでしょうか。

○山本教授 ありがとうございます。  
私はこの講座の第4代の教授になります。講

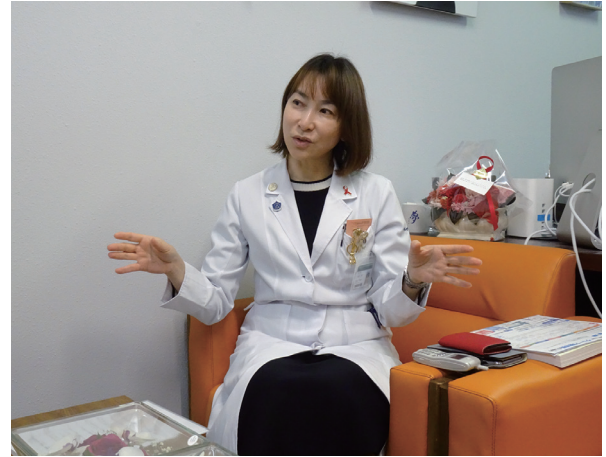
座の歴史を見ますと、1981年に講座が出来たと聞いておまして、先代の藤田先生は、ご着任前は肺がんが専門でいらっしゃいましたが、沖縄県が感染症の重要な位置を占めているという事で、感染症のお仕事が多かったと思います。私が着任する頃は、コロナが沖縄県で大きな問題でしたし、感染症の専門家ということでこちらに着任することになったのではと考えております。私は長崎大学からこちらに来たのですが、第2代の教授は出身医局の大先輩です。2代目の斎藤先生が長崎大学の同じ医局から来られたことも含めて、色々な縁に導かれてこちらに来たと思っています。着任後1年と3か月の間に大きなコロナの波を去年の5月から7月くらいまで経験して、やはり沖縄県における感染症対策をしっかりやらないといけないと、最初の年から受け止めました。当医局は大きな医局で、感染症、呼吸器、消化器という、内科の広い領

域を担当していることもありますし、人材育成に力を入れて、しっかり沖縄県に残って、専門医療が出来る人材を育てていくことが1番の使命と考えています。

○久貝理事 感染症を中心として、呼吸器全般という事で、大変期待が大きいと思います。講座の運営方針についてお聞かせ願います。

○山本教授 主に私が掲げる目標として3つあります。1つ目は、若い人が集まらないと講座の発展は無いと考えています。若い人材が集まるような魅力ある講座、未来に向かって新しいことをどんどん取り入れていくような講座を目指したいと思っています。若い人というのは医師だけではなく、医学部の学生さんも含めます。若いうちから医療や専門性の重要性、研究マインドを育成していきたいですね。

2点目は、高度医療です。沖縄県は、今までの歴史の中で、戦後に短い時間で医療を広く、ファーストタッチを診れる人をたくさん作らないといけないという信念の下に現在の研修医制度が出来て、研修医制度は成熟しています。研修医の育成プログラムは昔から充実していて、群星であったり、県立病院群が活発に活動されていて、全国からたくさん人が集まっています。プライマリ・ケア医をたくさん育ててきている土壌はあります。しかし、今は沖縄県も発展してきていて、専門医療が特に重要視されてきています。県民が高度な医療を受けられるという事が必要になってきます。高度医療など専門性の高い治療、診断が沖縄県で完結するようにしていかなければと思います。その中で大学の講座の役割は大きく、より専門性の高い医療を提供できる医師を育てていく事が重要と考えています。感染症、呼吸器、消化器すべてにおいてそのように考えています。医療は日々進歩しますので。内科では、今まで外科が行っていたような処置を、様々な機器や手技で、内科的に治療まで出来る領域が広がり、この数十年で発展しているんですね。しかしその手技が沖縄県の非常に限られた人しかできないわけです。ま



だ全国に比べて高い専門性を担う人材が少ないという現状があります。そこを我々の講座でしっかり育てていって、沖縄県で完結出来るようにしたいと思っています。専門性の高い医療を提供できる医師を育てるという事です。

○久貝理事 ベーシックな部分はほぼ成熟しているだろうと言う事でしょうか？

○山本教授 そうですね。そこは沖縄県は成熟していると思っています。

3点目は、リサーチマインドを持った医師を育てる事が重要で、ここもまだ沖縄県は弱いと考えています。大学も1つしかありませんし、そのリサーチができる場所というのも、他の県に比べて多くはないので、提供していきたいですし、リサーチマインドが若い時からあると、医療も自然に発展します。新しい方向に若い人たちが進んでいくのは、とても大事だと思っていますので、沖縄県から新しい医学や医療が生まれる事を目指して頑張っていきたいです。

○久貝理事 大学の使命である、診療に取り組む研究という事で、情熱が重要ですけど、それをしっかり取り入れていくという事です。女性教授第1号という事で、女性ならではの視点でございますか？

○山本教授 そうですね。これは沖縄だけに限ったことではなくて、例えば講座の長であったりとか、指導的立場に女性が立つ事が日本国

内で少なく、特に医学の場では、まだ非常に少ないですね。例えば大学の臨床医学の講座で、女性がトップのところは数えるほどですし、私の専門の領域（呼吸器内科）でいうと私立大学まで入れて3人目です。女性は様々なポテンシャルを持っていますし、実際に医学部でも半分が女性な訳ですから、女性の能力を伸ばして、その人たちがしっかり発揮出来る環境にしてあげるのは、沖縄県ももちろんですけども全国の医療を支えていくにあたっては必須の事だと思います。女性は研修を終えたら家庭にこもって、アルバイト中心ではなく、家庭を持ちながらもキャリアアップ出来る環境を整えていく事がとても重要だと思います。医局員を見ていると特に沖縄県の方は謙虚な人が多いと思っています。自分には難しいだろうと最初から思って、チャレンジしない人が多いような印象です。周りから上手に引っ張ってあげれば、やってみようという気になると思うんですが、自分が自分がと進んでいく人が少ないイメージがあります。そんな中で、あなたは出来るよと、しっかり伝えていって、出来る人はたくさんいると思うんです。彼女たちにもっとそのような場を与えてあげて、医局の内外で、様々な関連病院がありますから、総合病院の部長だったり、指導的立場にもどんどん女性がなっていった方がいいと思っています。医局内では平等に、女性にも同じように促していきたいと思っています。

**○久貝理事** 本当に医学部の半数近くはは女性で、今後は、今年の4月から働き方改革が始まり、女性の働き方がとても今までの昭和の、「女性は内で男は外へ出て」というのが崩れてくるという事でしょうか。

**○山本教授** 既に崩れているとは思いますが、女性だけでもダメだし、男性だけでもダメだし、男性と女性が調和しながら、医局もそうだと思います。例えばきつい仕事は全部男性に押し付けるかというそれは間違いであって、みんなでカバー出来るような形の医局を目指していきたいと思っています。簡単なことではないと思いま



すが、みんなが不平等性を感じずに、それぞれの生活を楽しみつつ、信念とやりがいをもって仕事ができる場所が1番理想と思っています。

**○久貝理事** 特に女性の第1号の教授という事で、その辺は深い思いになるかなと思います。

先生ご専門が感染症という事ですが、消化器内科に触れさせていただきたいと思っております。数が十分ではなくてですね、実際いたとしても中南部とか、私立の病院も多い感じがします。第一内科、消化器内科の育成というのはどういう風なお考えでしょうか。

**○山本教授** これは1番今、問題であり、非常に苦労しているところです。もちろん若手人材にたくさん入局してもらって将来的には消化器内科専門医を育成する事がとても重要だと思っていますが、時間がかかる事なんですね。来年どうするかとか言われたときに難しいところではありますが、まずは、消化器内科が学問的にも面白いし、手に職が就く科であることを伝えていきたいと思っております。消化器内科こそ女性にとってもいい科なんです。何故かという、手に職が就くからなんです。例えば、時間が制限されるような期間、お子さんが小さい期間であっても検査で十分診療が可能なわけですね。病棟や治療になると、当直も入ってきますが、検査で十分診療に貢献することが出来るのです。健康診断や通常の検査にも医師が足りていません。消化器内科のイメージが、沖縄県で違うと思っているのが、緊急が多い、

止血が多いという点です。飲酒が多い県で、救急車の利用が多い県であるところが関係しているかもしれません。

○久貝理事     そういうイメージありますね。

○山本教授     消化器内科に緊急や夜間に呼ばれて止血をするってイメージがあるみたいですね。全国、本土でいくと、夜間の止血は少なくなっています。沖縄に来て「出血が多い。」というのが沖縄県の印象としてあり、そこは特殊だと思います。逆に言うと、沖縄県でトレーニングすると止血出来る医者になります。本土では症例が少ないから、逆に勉強させたいと他大学の教授からいわれました。自分たちで緊急の時に止血できないといけないわけですから、危険を感じながら止血をするのはとても重要な経験なんですね。今本土ではそのようなチャンスが少なくなっているという事で。

○久貝理事     消化器内科は止血もそうですけど、専門性となる ESD とかそっちの方へシフトしたいと。止血はプライマリケアとのお考えですか？

○山本教授     止血は消化器内科のプライマリ・ケアなので、そういった患者層が多いというのが沖縄県の特徴ですね。

○久貝理事     患者教育は関係ありますか？

○山本教授     関係あると思います。ただ県民性や行政も含めて、全体で計画していかないと1つの講座から発信しても難しいと思います。出血が命に係わる事や救急車を安易に使う事で他の人が使えなくなるなど、医療逼迫が常に沖縄県で問題になっていますが、救急車の発動が多すぎて、病気が起こってから考えるという県民性があるのか、予防や維持治療がまだ定着していないイメージがあります。普段自分は症状がないからこの薬はいらんだろうではなくて、こういう事を起こさない為に今飲む必要があるんですよ、その意識が定着していないと感じますから、他講座の教授や市県の行政と協力をして県民の医療に対する意識を変えていかないと、本当に医療が必要な人が受けられないことになってきます。

○久貝理事     同感です。

琉大が医学部を設置してかれこれ40年以上になるんですが、離島へき地への医師派遣が大きな期待になっていると思うんですが、その辺は先生どういう風なお考えをお持ちでしょうか。

○山本教授     もちろん、もっと大学の講座が大きくなって、人材がまんべんなく送れるようになれば最高だと思います。消化器も呼吸器も



含めて。しかし、歴史的に大学が県病院よりも遅くできていたり、講座の構成として3つの科がある中で、まだ十分に人を出せていないというところがあります。医局の良さは、長い年月をかけて県内の医療に多くの人材をキャリアアップしながら育てることができるのが最も大きなところなんですね。残念ながらあまり浸透していないので、私立の病院や県立病院と一緒に提携をして、大学でしっかり教育しますから、そちらの病院に指導医として出しますから、うちで預らせてくださいというような形になればと考えています。もっと医局の講座を信頼していただいて、若い医師を大学のみで抱えるわけではなく、地域の先生方と共有していくので、他病院の方々には是非ご理解をいただきたいと思っています。

○久貝理事 設立の関係でそうなっていて、たぶんどっかですり合わせないとずっと平行線になる。特にへき地離島にしわ寄せがきていて、大学に係る期待も大きいですね。

○山本教授 そうなんです。県内の病院が大学講座に人を集めることに協力していただければもっとうまくいくのではないかと考えています。

○久貝理事 是非広報に書かせていただきます。

○山本教授 よろしくお願い致します。

○久貝理事 医師会に対するご要望はございますか？

○山本教授 そうですね、医師会の先生方には大変お世話になっています。沖縄県では、県医師会全体というよりも、北部、中部、南部で独立されている印象があります。私が来てすぐ閉会となりましたが、コロナ対策会議が、私が着任して1回だけ開催されました。それぞれの地域の取り組みを発言されていて、県としてど

うするかという議論が無く、新しい感染症に対してどうするか。沖縄県は観光客が年間1,000万人来るような島ですから、新しい感染症が流行るのは必至です。だから沖縄県でまず検知しないと、国も防衛が出来ないわけです。

○久貝理事 八重山もあるし、宮古もありますしね。

○山本教授 私は、県内にスポットを置いてリアルタイムに皆さんで情報共有して、このようにしましょとみんながその診療の方向性を統一して標準化出来ればもっと対策は上手くいくし、苦勞をする人も少なくなると思います。医師会の先生方と協力してそのシステムを構築する事を私は掲げたいと思っています。ご協力をいただければ大変ありがたいです。

○久貝理事 感染症の観点から1つの突破口になりますか？

○山本教授 そうですね。沖縄県モデルみたいな形で作っていけば国に対してもアピール力があると思いますし、注目されると考えてます。

○久貝理事 医師会が前面に立つわけではないですけど、協力していきたいと思っています。取りまとめ役として。

○山本教授 患者さんをファーストタッチで診るのは医師会の先生方が多いので、そういったところの情報を、皆で共有できるように。

○久貝理事 ごもっともだと思えます。

最後に健康法とか座右の銘とかをお伺いしたいのですが、健康法からお伺いします。

○山本教授 そうですね。今私は健康と言えるのか分かりませんが、忙しい日々を送ってますので。着任して、それ以前と比べると体重も増えましたし、もっと自分自身の健康には注力しないといけないと思い、先月ジムに入会しました。

どのように日頃から継続していくかが重要ですが、まずは毎日体重計に乗るという事が自分自身を知るという意味で大事と思ってます。会食も多いですので、セーブをしたり、調整をするという事、また、しっかり健康診断を受けるという事ですね。スポーツが大好きで、テニスもゴルフもやっていたんですけど、着任してからほとんど出来ていなくて、健康の為と思って時間を作ることが重要ななと思っています。

○久貝理事     まずは健康は体重からと。

○山本教授     そうですね。  
体重はやっぱり1つの客観的なバロメーターですので。まずはそこから始めたいと思います。

○久貝理事     沖縄の場合はゴルフ場もたくさんあるし、時間を見つけて行かれたらと思います。  
趣味はゴルフでよろしいでしょうか。

○山本教授     趣味というほど最近は出来ていないのですが、テニスとゴルフは好きです。

○久貝理事     医師会の皆様は結構されるので、もしかしたらお誘いがあると思います。  
ちなみにスコアの方は？

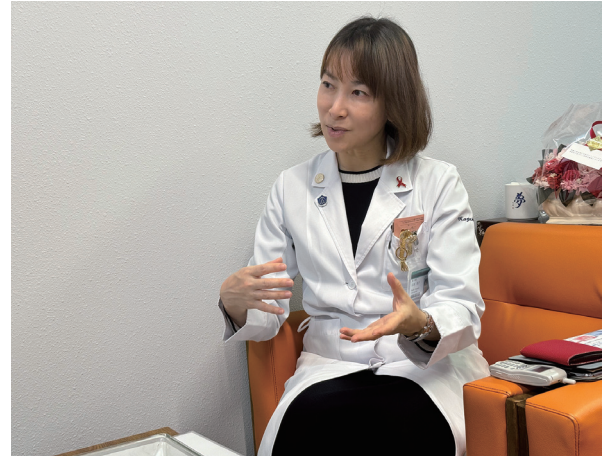
○山本教授     ベストスコアは91ですね。

○久貝理事     素晴らしいですね。

○山本教授     なかなか上達しないですが。

○久貝理事     是非時間を見つけて。  
最後に座右の銘をお伺いいたします。

○山本教授     講座のトップになって大事なのは、「和顔愛語」という言葉にあるように和を大事にして、柔和な顔で、思いやりのある言葉で人と対峙するという事を自分の中に留めて



P R O F I L E

- 1999年 佐賀医科大学医学部 卒業
- 1999年 国立国際医療センター 初期研修医
- 2001年 長崎医療センター 後期研修医
- 2004年 長崎大学大学院 臨床検査医学講座
- 2007年 医学博士取得
- 2009年 米国ボストン大学 博士研究員
- 2013年 長崎医療センター 呼吸器内科 医師
- 2015年 長崎大学病院 感染制御教育センター 助教
- 2021年 長崎大学病院 呼吸器内科 助教
- 2022年 琉球大学大学院 医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学講座 教授

おく必要があると思っております。どうしても指導的立場になると、きつい言葉など言いがちになるし、できるだけ人を傷つけないように愛が伝わるようにして行きたいです。完璧に行うのは中々難しいですけども、沖縄は特に和を大事にすることをこの1年と3か月で感じておりますので、教室を上手に運営していくためには皆さんが楽しく明るく教室で働いてもらえるのが大事と思ってます。

○久貝理事     素晴らしい事だと思います。  
これにてインタビューを終了させていただきます。

ありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 久貝 忠男